



⑪ 体当たり勇士の碑

空の要塞といわれた大型爆撃機B29を体当たりで撃墜した第一号。
「神風特別攻撃隊」誕生の2ヶ月前、昭和19年(1944)8月20日、80余機のB29が八幡を空襲した。少年飛行兵、野辺重夫陸軍准尉・高木伝蔵陸軍軍曹の戦闘機「屠龍」は、八幡製鐵所に爆弾投下は必死と察知し、「野辺、今から体当たり」の一語を残し、自らの意志で体当たりを敢行し2機を撃墜した。後続機のパイロットは、トルーマン大統領(原爆投下を指令)の甥といわれ、アメリカ軍は、「体当たり」を警戒するようになった。

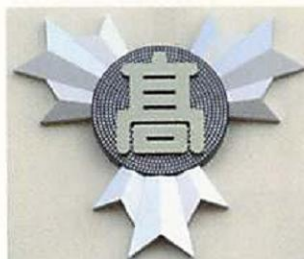
- ※空中戦だったため、その様子は多くの人に目撃され、映像も現存する。
- ※墜落の場所に、折尾の町民が、砂利などを運び、手作りで忠魂碑を建立。
- ※毎年8月第1日曜日に、清掃活動が行われている。

■所在地：八幡西区大膳1-13(丘の上)

今だから語れる
真実がある!

※「体当たり攻撃」は、「原爆投下目標地を、小倉から長崎に変更」させるほどの、脅威を与えた!

昭和20年(1945)8月9日、原爆搭載機B29のパイロットが「屠龍」をレーダーでキャッチし、「体当たり攻撃の可能性あり、投下目標地を長崎に変更!」とテニアン基地へ連絡。戦後、アメリカ戦略爆撃隊の追跡調査班が裏づけ調査のために来日し、下関小月基地の「屠龍」2機が関門上空を哨戒飛行していた事実が確認された。この調査で「原爆・小倉投下回避」の真相を知った「屠龍」のパイロットは、長崎の人に申し訳ないと、生前、一部の人にしか漏らさなかった。小倉回避は、天候不良や八幡空襲の残煙といわれていたが、主要因は、「屠龍」だった。八幡は投下予定地ではなかったが、小倉に投下されていれば、被爆の影響を受けていた。



・古野繁実海軍少佐(東筑中学校35回生、享年23歳)「九軍神」の一人。

東筑中学時代、機雷のある鷹見神社境内で海軍兵学校の受験勉強をしていた。
昭和16年(1941)12月8日の真珠湾攻撃において、航空攻撃の前日、2人乗り5隻の特殊潜航艇艇長として出撃。翌年、大本営は戦死した9人を「軍神」として扱うことを発表。東筑中学校では、全校生徒が古野家を行軍で訪れて哀悼の意を捧げた。また、国民による軍神詣は、1年以上も続いた。
「君のため何か惜しまん若桜 散って甲斐あるいのちなりせば」(辞世の句)

・酒巻和男海軍少尉(太平洋戦争における日本人捕虜第一号、除隊後ブラジル・トヨタ社長)

10人のうち残る一人。当時、戦死者は英雄、捕虜や生きて帰還することは恥とされていたため、捕虜となったことは公表されず、存在自体も抹殺されていた。自決しようとしたが思いとどまり、多くの日本人捕虜を説得し命を救った。捕虜としての態度は立派でアメリカ軍からも賞賛された。

⑫ 疋田小三次の墓

寛永9年(1632)黒田騒動で井上忠三郎の脱藩を助勢。武士道を貫き最後まで自白しなかったために親子ともに責め殺された。その後、異変が相次ぎ、村人は小三次親子を哀れに思い、墓を建てて供養した。
菅原神社(堀川町)には、疋田小三次親子が祀られている。

■所在地：八幡西区東筑2-8(正願寺の裏)



⑬ 鷹見神社

寛永7年(1630)、疋田小三次らによって、現在の場所に移され、明治5年(1930)折尾村の村社となる。

- ※機雷：日露戦争で使用された日本帝国海軍の機雷。
第二次大戦中、鉄金属の軍への供出を免れた。東筑中学校2回生の出光万兵衛海軍中将与古野縫之助陸軍中將が、「日本国家安泰と神のご加護」の願いを込めて奉納した。

■所在地：八幡西区南鷹見町10-56